

語彙の多様性と難易度から見た意見文の分析

—中国・韓国の日本語学習者と日本人大学生を例に—

井上 次夫¹⁾

(2017年9月29日受付、2017年12月18日受理)

Analysis of Opinion Sentences Based on Lexical Diversity and Difficulty Level : A Case of Chinese and Korean Learners of Japanese and Japanese University Students

Tsugio INOUE¹⁾

(Received: September 29, 2017, Accepted: December 18, 2017)

要 旨

従来、意見文の作成と評価では文章構成が重視されてきたが、内容を支える語彙も軽視できない。そこで、中国・韓国の日本語学習者と日本人大学生が作成した新聞投書タスクを対象に語彙の多様性と難易度の観点から検討し、次の仮説を立てて検証した。

- (1) 日本語学習者の語彙多様性は日本語母語話者より小さい。
- (2) 日本語学習者の上位群の難易度別語彙の使用状況は日本語母語話者に近い。

その結果、語彙多様性は、韓国人 < 日本人 < 中国人の順となり、(1)は支持されなかった。一方、難易度別の語彙使用率は、日本人大学生、中国・韓国の日本語学習者上位群の両者が、上級後半 < 上級前半 < 初級後半 < 中級後半 < 中級前半 < 初級前半の順で一致し、(2)は支持された。

以上から、意見文の語彙指導に際しては、内容を表現するために使用する語彙の難易度の適切さに留意する必要性が示唆される。

キーワード：意見文、新聞投書、使用語彙、語彙多様性、語彙の難易度

Abstract

This paper examines the use of vocabulary, focusing on diversity and difficulty level, used by Chinese and Korean learners of Japanese learners and Japanese university students in newspaper contributions regarding the survival of hospitals by, and examined the following hypotheses:

- (1) Lexical diversity is smaller for learners of Japanese than for native Japanese speakers.
- (2) Higher level learners of Japanese use words of different difficulty levels in a similar manner to native Japanese speakers.

The results indicated that lexical diversity was in the order of Koreans < Japanese < Chinese, not supporting hypothesis (1). Moreover, the rates of usage of words of different difficulty levels was similar for native Japanese speakers and learners of Japanese, in the order of late advanced < middle advanced < late beginner < middle intermediate < early intermediate < early beginner, supporting hypothesis (2).

Based on the above, it can be said that, in teaching vocabulary for opinion sentences, it is necessary to emphasize the use of vocabulary of difficulty levels appropriate to the content and opinion.

Keywords: opinion sentence, letter to the editor, active vocabulary, lexical diversity, lexical level

1) 高知県立大学文化学部 教授
Professor, Faculty of Cultural Studies, University of Kochi

1. はじめに

意見文は、何かの問題について自分の考えをまとめて述べた文章である¹⁾。意見文の指導は、国語教育はもとより日本語教育でも行われ、通常、国語教育では作文教育の中で、日本語教育では文章を書く指導の中で行われている。従来、意見文の作成と評価においてはともに文章構成が重視されているが、内容を表現する語彙も軽視することはできない。しかし、語彙については、意見文の作成及び評価段階において個々の語への対処はある程度可能なのに対し、文章全般にわたる使用語彙への対処は難しい。

そこで、本稿では、国語教育及び日本語教育における意見文の作成及び評価を通じた語彙指導全般への示唆を得ることを目的に、日本語学習者である中国・韓国人留学生と日本語母語話者である日本人大学生が作成した新聞投書を対象に、使用語彙の多様性と難易度の観点から分析を行う。そして、総合評価で高い評価を得た意見文としての新聞投書に見られる語彙の使用状況を調査し、語彙面から見た意見文の評価に關与する要因を明らかにする。

以下、2章では意見文の評価に関する先行研究を概観し、3章で意見文としての新聞投書の具体例について語彙の多様性と難易度の観点から分析する。そして、4章では作成者の母語別・群別に新聞投書の使用語彙について仮説を立てて検証し、5章でまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究

意見文の評価についてみると、例えば吉川・岸(2006)は国語教育における作文の評価項目を取り上げ、意見文の評価は何に影響を受けるか、その決定要因について分析している。そして、従来の作文の評価では評価基準の内容の曖昧さ・数の多さが評価を難しくしていることを指摘した。そこでは、意見文に適すると思われる評価項目の候補24を挙げ²⁾、小学校の教科書に掲載された意見文を材料に、国立大学の教育学部生75人を対象として評価に関する調査を行い、その結果、「目的に応じて、簡単に書いたり、詳しく書いたりしている」「文章全体の組み立てが整っている」「説得力がある」の3項目を意見文に適切な評価項目として提言している。

一方、日本語教育では、早くは森田(1981)、菊池(1987)が作文の評価方法の実際を報告している。その後、田中他(1998a・1998b)が作文の評価基準について日本語教師と一般日本人を対象とする調査を行い、「正確さ」「構成・形式」「内容」「豊かさ」「趣旨の明確さ」の5つの観点を示している。

近年では、アカデミック・ライティングの立場から文章の分かりにくさの原因について植田・今井(2008)が留学生の自由作文を対象に「文レベル」と「文章構成」を評価項目として分析している。同じくアカデミック・ライティングの立場から、長谷川・堤(2011)も日本語学習者の意見文を対象に文章の分かりにくさの要因について、主張文とその根拠となる事実文に着目した「文章構成」を評価項目として分析している³⁾。両者が分析対象とする文章の種類は異なるが、長谷川・堤(2011)が用いた意見文の分析の観点としての「文章構成」は、田中他(1998a・1998b)が指摘した「重視されている評価基準」の一つであり、これは、吉川・岸(2006)が示した評価項目の「文章全体の組み立て」と一致している⁴⁾。

その後、長谷川・堤(2012)は意見文の分かりやすさの決定要因を探ることを目的に、日本語学習者の意見文20編⁵⁾を材料に、大学の日本語教育教員6人と専門科目教員10人に対して4段階評価(1 非常に分かりにくい、2 分かりにくい、3 分かりやすい、4 非常に分かりやすい)及びその判断理由を求めて分析を行った。その結果、意見文においては文法や表現等の言語形式よりも「文章構成」や「論理の一

貫性」が高く評価される傾向があるとしている。

また近時では、金澤 (2014) が「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」(以下「YNU書き言葉コーパス」)を独自に開発し、レベル別・タスク別に収集した作文データを対象に「タスクの達成」「タスクの詳細さ・正確さ」「読み手配慮」「体裁・文体」の4つの観点から評価を行っている。

このように、作文、特に意見文の評価項目または評価基準としては、大きく文章構成や表現形式を始めとする客観的な部分に関するものと表現内容や分かりやすさ、説得力を始めとする主観的な部分に関するものとに大別することができる。しかし、内容を支える語彙については、語彙選択の適切性、必要な使用語彙の有無等がそれぞれ作文や意見文の評価における客観的な部分、主観的な部分の双方に関与すると考えられるが、これに焦点を当てて分析したものは管見の限り見られない。

次章では、金澤 (2014) の作文データのうち新聞投書タスクのデータ (以下、新聞投書) を取り上げ、そこで解説のために例示している新聞投書4例の使用語彙の状況について語彙の多様性と難易度の観点から予備的調査を行う。

3. 新聞投書4例の分析

3.1 データの概要

YNU書き言葉コーパスは、横浜国立大学の日本人大学生 (30人) と同大学に所属する留学生 (韓国語母語話者30人、中国語母語話者30人) を対象に行った12種類の作文タスクによる書き言葉のデータ、計1,080編 (母語別各グループ360編ずつ) からなる。本コーパスの母語別の人数、各グループの人数を表1に示す。

表1 YNU書き言葉コーパスにおける被調査者の人数

	上位群	中位群	下位群	合計
韓国語母語話者 (K)	10	10	10	30
中国語母語話者 (C)	10	10	10	30
日本語母語話者 (J)	(群分類なし)			30
合計	20	20	20	90

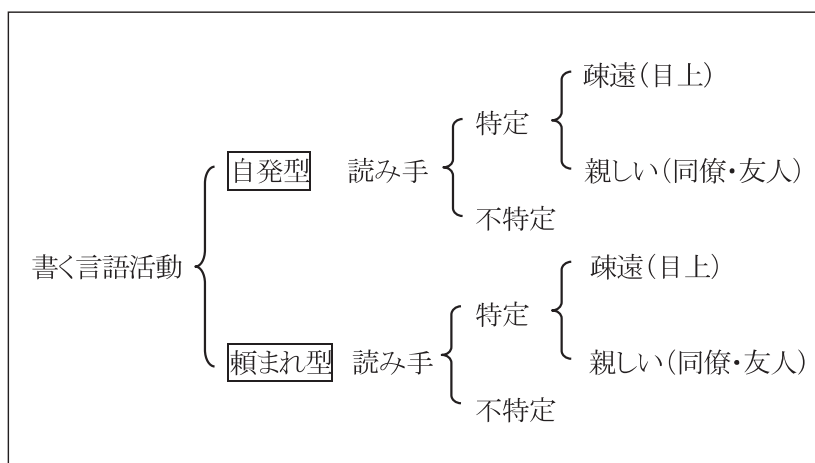


図1 書く言語活動の分類

また、YNU書き言葉コーパスでは、図1のように書く言語活動を大きく「自発型」と「頼まれ型」に分ける。そして、それぞれの読み手を「特定の相手」と「不特定の相手」に分け、「特定の相手」の場合には、親疎関係（疎遠：目上、親しい：同僚・友人）を考慮している。その上で、文章の長さを、やや短い文章が予想される「依頼・説明・描写」の長さAと、長い文章が予想される「意見・手紙・物語」の長さBとしている。それによると、新聞投書は、自分から書く「自発型」、読み手が「不特定の相手」、長さがある程度長くなる「意見文」として位置づけられている⁶⁾。

本稿で分析するデータは、タスク6「市民病院の閉鎖について投書する」（金澤2014：149-177）の日本語母語話者、日本語学習者の上位群、中位群、下位群の中から例示されている新聞投書である。

以下、タスクの内容、タスクの評価基準、例示されている日本語母語話者と日本語学習者の各新聞投書の本文とそれに対する評価を示す。

3. 1. 1 タスクの内容

「経営難のため、あなたの町では、市民総合病院の閉鎖が検討されています。この病院には近隣の町にはない産婦人科、リハビリテーション科があり地域住民への影響が心配されます。現行の診療体制での存続を求め、あなたの意見を新聞に投書してください。」

3. 1. 2 タスクの評価基準

最初に評価者3人がそれぞれ、以下の評価基準①～④により個々の評価を行う。明記されていないが、評価は、○：該当、×：非該当、△：どちらとも言えない、と判断して行われていると思われる。その後、話し合いを通じて3人の評価が一致したところで、それを最終的な評価としたという。

- ①「タスクの達成」：「病院閉鎖」に対する反対意見や存続を求める要望が伝えられたかどうか。
3段階評価（○、△、×）。
- ②「タスクの詳細さ・正確さ」：適切な表現を使って、閉鎖による問題が指摘されているかどうか。
 - ア 問題提起、閉鎖後の問題点の具体的な指摘、閉鎖反対の主張があるか。
2段階評価（○、×）。
 - イ 言語形式に誤りがないか。
2段階評価（○、×）。
- ③「読み手配慮」：不特定の読者に向けた書き方になっているかどうか。
 - ア 不快感を与えない表現になっているか。
2段階評価（○、×）。
 - イ 敬語や終助詞を使用した場合に誤りがないか。
2段階評価（○、×）。
- ④「体裁・文体」：投書文としての体裁をなしているかどうか。
 - ア 投書文としての体裁が整っているか。
2段階評価（○、×）。
 - イ 文体が適切に使用されているか。
2段階評価（○、×）。

総合評価は4段階評価である。①～④の評価項目のすべてが○ならば「◎」。1つの項目でも△や×があれば「○以下」。△が3つ、または△と×があれば「△」。×が2つ以上あれば「×」。ただし、①が△ならば総合評価も「△」、同様に×ならば「×」とする⁷⁾。

3. 1. 3 新聞投書

(1) 日本語母語話者【J010】(日本人大学生)

今回、市民総合病院閉鎖の知らせを聞き、地域の医療体制が崩壊するのではないかと心配している。市民総合病院はこの市だけではなく隣町の住民をも支える重要な病院であり、この病院が閉鎖されたら多くの老人が時間と金をかけて他の病院に通院しなければならなくなる。更に、隣町の病院には産婦人科やリハビリテーション科がなく、地域住民はこの市民総合病院を頼りにしているのが現状である。産婦人科が存在しなくなるということは、町の未来を支える子どもたちを安心して産める環境がなくなるということの意味する。市は経営難を理由に閉鎖を検討しているというが、市の財政で削る所は他にもたくさんあるはずだ。医療体制の確保は自治体運営に必須の条件であり、経営難という理由で市民総合病院が閉鎖されることはあってはならない。安心して治療を受けられるように今後も市民総合病院が存続していくことを願うばかりである。

《評価》 総合評価 ○

① ○ ② ○ (ア○ イ○) ③ ○ (ア○ イ○) ④ ○ (ア○ イ○)

(2) 日本語学習者

A上位【K037】(韓国語母語話者)

『○○市民病院の存続を要請する』

近日、○○市では市当局が○○市民総合病院の閉鎖を検討しているということに関して、それに反対する市民の声が高まっている。市当局が掲げている閉鎖の理由は、病院の経営上の問題であるが、それが市民の現実を十分に配慮した上での判断であるとは思えない。現在市民病院には産婦人科リハビリ科があり、この二つの科は○○市の近隣病院にはない唯一の施設である。閉鎖した場合市民にその影響は直撃するだろう。産婦人科はその特性上、救急時に迅速な対応が欠かせないのだが、市民病院がなくなったら、妊婦および家族が抱える不安は大きくなるだろう。また市内唯一のリハビリ施設であるだけに、現在数多くの障害者が市民病院で治療を受けているが、その人々への悪影響は市は無視しているだろうか。財政問題の責任を市民に回そうとする市当局は市民の現実をもっと配慮すべきだ。2つの科目を補う民間の施設がない現時点での市民病院の閉鎖は反対だ。現行の○○市民総合病院の存続を強く要請する。

《評価》 総合評価 ○

① ○ ② △ (ア○ イ×) ③ ○ (ア○ イ○) ④ ○ (ア○ イ○)

B中位【C005】(中国語母語話者)

○○新聞：私は○○に住んでいる、【C005】と申します。貴社に手紙を出したのは、○○の市民病院が閉鎖になるという件です。○○市民病院はこの地域に唯一の病院で、なくなったら、住民の私たちに非常に大きな影響をもたらします。この地域のお年寄りの方が多く、病院を利用する機会も多いです。そして妊婦も多くいらっしゃるため、病院の必要性が高い地域だと思います。住民たちの権益を無視し市

民病院を閉鎖させるのはどうしても納得できず、貴社に手紙を出させていただきました。私達のために、貴社が社会にこの事実を知らせて、助けていただけませんか。

《評価》 総合評価 △

① △ ② × (ア× イ×) ③ ○ (ア○ イ○) ④ △ (ア× イ○)

C下位【C025】(中国語母語話者)

○○新聞：市民総合病院は経営不況ので、今年年末は閉院することが聞いています。私はこの病院が続けたほうがいいと思います。この市民病院の婦人科と康復中心はこの付近の病院にありませんでした。もしこの病院が閉まるなら、ここに住んでいる居民にとっては本当に不便でした。この辺りは老人と婦人が多いので皆なこの病院が保存してほしいと言って、ほかの病院は遠くて不便でした。病院はそんな簡単に閉めることはできないだろう。経営不況になっても、政府が居民に考えて、支援してほしいと思います。私達はマスコミの力を信じて、政府によく考えて、この病院を保存したいと思います。よろしくお願いします。

《評価》 総合評価 ×

① × ② × (ア× イ×) ③ ○ (ア○ イ○) ④ × (ア× イ×)

評価内容の詳細については金澤 (2014: 133-147) を参照されたい。次項ではこの投書タスクの総合評価を前提として、上掲の新聞投書4例について語彙の多様性と難易度の観点から分析を行う。そして、意見文としての新聞投書における日本語母語話者と日本語学習者の使用語彙の状況を分析する。

3. 2 データの語彙分析

前項で見たようにYNU書き言葉コーパスの新聞投書に対するタスク達成度の総合評価によれば、日本語母語話者【J010】は○、A日本語学習者の上位【K037】は○、B中位【C005】は△、C下位【C025】は×であった。ここでは、それぞれの新聞投書について語彙の多様性と難易度の観点から分析を行う。

一般に、高い評価を受ける意見文の使用語彙の状況について考えてみると、次の2点が予測できるのではないかと思われる。

- ① 意見の主張に必要なさまざまな語彙を豊かに使用している。
- ② 意見の主張に必要な適切な難易度の語彙を効果的に使用している。

そこで、①については「語彙多様性 (lexical diversity)」の観点から、②については「語彙の難易度 (lexical difficulty level)」の観点から分析を行う。

3. 2. 1 語彙の多様性

田島・深田・佐藤 (2008: 51-52) によると、語彙多様性は数値化する場合、延べ語数における異なり語数の割合という指標を用いるのが一般的であるという。これは、全体量に対して異なる語の数がどれくらいあるのかを示す指標 (Type / Token Ratio: TTR) である。この値が大きいほどその文章では使用される語の種類が多く、繰り返し使用される語が少ない、つまり語彙が豊かであるということになる。しかし、

この指標では全体量が多い場合、つまり文章が長くなると分母の延べ語数が多くなり、値が小さくなってしまふ点が問題である。また、短い作文で異なり語数が少ない場合と長い作文で異なり語数が多い場合で同じ値が出てしまい両者を区別できないという問題点があるという。

一方、橋本（2014：289-290）では語彙多様性を「そのタスクを達成するためにはどれくらいの種類の実質語（名詞、動詞、形容詞、形状詞）を必要とするか」と定義している。そして、語彙多様性を測定する指標として Guiraud 値を採用する。これは、上述の指標 TTR を補正した値で、異なり語数を延べ語数の平方根で割ったものであり、比較するコーパスサイズが著しく異なる場合に、延べ語数の平方根を取ることで延べ語数のサイズを圧縮し、データの差を縮めるものであるという。本稿では、この比較的安定した値を示す Guiraud 値（以下、G 値）を語彙多様性の指標として採用する。

$$G \text{ 値} = \text{Type (異なり語数)} / \sqrt{\text{Token (延べ語数)}}$$

さて、前節で示した新聞投書 4 例の語彙多様性（G 値）についてみると、日本語母語話者【J010】が最も大きく、次いで日本語学習者の上位【K037】、中位【C005】、下位【C025】の順であると予想できるだろう。そこで、「学習項目解析システム」（筑波大学留学生センター）を使用し、新聞投書の語彙項目（以下、語）について異なり語数、延べ語数を求めて G 値を算出した⁸⁾。結果は次の通りである。

$$\text{中位} 5.5 (53/\sqrt{81}) < \text{日本語母語話者} 6.0 (71/\sqrt{142}) < \text{下位} 6.4 (63/\sqrt{97}) < \text{上位} 6.9 (86/\sqrt{156})$$

この結果では、日本語母語話者【J010】の語彙多様性は日本語学習者の中位【C005】よりも大きい、上位【K037】・下位【C025】と比べると大きくはない。また、日本語学習者の下位【C025】の語彙多様性は他と比べて特に小さいものではない。したがって、この結果からは①で予測したのと異なり、日本語母語話者が必ずしもさまざまな必要な語彙を豊かに使用しているとは限らないということになる。

3. 2. 2 語彙の難易度

日本語教育における語彙の難易度レベルについては、例えば国際交流基金他（1994）の旧語彙リストの 4 段階、松下（2017）の「日本語を勉強する人のための語彙データベース」の 5 段階があるが、本稿では「学習項目解析システム」（前出）を調査に使用するため、当該システムが採用している「日本語教育語彙表」ver1.0⁹⁾の 6 段階（初級の前半・後半、中級の前半・後半、上級の前半・後半）によるものとする。「日本語教育語彙表」ver1.0は、日本語学習者向け辞書開発の基礎資料として開発されたもので、語彙表の作成には国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）及び初級から上級までの市販教科書 100 冊から作成した「日本語教科書コーパス」（非公開）を使用し、日本語教育用の約 1 万 8 千語を収録している。

さて、前節の新聞投書 4 例の語彙の難易度レベルについて考えてみると、日本語母語話者【J010】が最も難易度が高く、次いで日本語学習者の上位【K037】、中位【C005】、下位【C025】の順であると予測することができるだろう。そこで、前項と同様に「学習項目解析システム」を使用し、新聞投書 4 例の使用語彙について上級（前半・後半）、初級（前半・後半）の使用率を求めると、結果は次の通りであった。なお、いずれも上級後半の語の使用はなかった。括弧内の分母は総語数、分子は該当語数を表す。

上級語の使用率 (%)

下位0 (0/74) < 中位3.7 (3/64) < 日本語母語話者7.0 (10/119) < 上位12.2 (19/142)

初級語の使用率 (%)

上位33.8 (48/142) < 日本語母語話者39.5 (47/119) < 中位54.7 (35/64) < 下位64.9 (48/74)

この結果では、日本語学習者の上位【K037】は日本語母語話者【J010】より上級語を多く使用し、初級語は日本語母語話者より少なく使用している。したがって、上位【K037】は必ずしも適切な難易度の語彙を効果的に使用していないわけでないと思われる。この結果からは、②で予測した通り、日本語学習者の上位群が日本語母語話者と同じように難易度が異なる語を柔軟に使い分けている状況を想定することができることになる。

3. 3 まとめ

新聞投書4例の使用語彙の状況を分析した結果の限りでは、総合評価が高い新聞投書において語彙の多様性は評価に関与していないと思われるのに対し、難易度が異なる語の使い分けという点では評価に関与している可能性があることが想定される。

4. 新聞投書の使用語彙

総合評価が高い評価を受ける意見文としての新聞投書の使用語彙の状況について、前章では次の2点の予測を示した(3.2)。

- ① 意見の主張に必要となるさまざまな語彙を豊かに使用している。
- ② 意見の主張に必要となる適切な難易度の語彙を効果的に使用している。

そして、新聞投書4例の分析結果からは、①が必ずしも予測通りではなかったこと、②が予測通りであったことから、本章では改めて語彙の多様性と難易度の観点から次の仮説を立てて検証を行う。

【仮説1】日本語学習者の語彙多様性は日本語母語話者より小さい。

【仮説2】日本語学習者の上位群の難易度別語彙の使用状況は日本語母語話者に近い。

4. 1 データの概要

以下、上掲の2つの仮説の検証をYNU書き言葉コーパスの新聞投書タスクの全90データを用いて行う。当該コーパスの被調査者(表1)について改めてみておくと、日本語学習者60人(中国語母語話者30人・韓国語母語話者30人)が、作文タスク12種類の総合評価に基づき、上位群、中位群、下位群に10人ずつ分類されている。ここではそれら日本語学習者について母語別・群別に日本語学習平均年数(学習歴)、投書タスクの達成率¹⁰⁾、日本語能力試験1級(含N1)の合格人数を加えて作成した資料を表2に示しておく。

表2 被調査者の属性

	上位群	中位群	下位群
	学習歴、達成率、1級	学習歴、達成率、1級	学習歴、達成率、1級
中国	8.0年、80%、10人	4.5年、40%、10人	3.5年、5%、6人
韓国	6.8年、90%、8人	4.5年、50%、9人	2.0年、25%、2人

なお、日本語母語話者は横浜国立大学に在学する日本人大学生30人であった。その投書タスクにおける総合評価は、評価項目の②ーア「問題提起、閉鎖後の問題点の具体的な指摘、閉鎖反対の主張がある」に必要な情報が欠けている者が一部見られるが、顕著な誤りはないため、全員がこのタスクを達成していたということである（金澤2014：137）。したがって、日本人大学生においては日本語学習者群に行ったような群分類は行われていない。表1参照。

4.2 新聞投書の語彙多様性

仮説1「日本語学習者の語彙多様性は日本語母語話者より小さい」ことを検証するため、母語別に語彙多様性の調査を行う。その際、被調査者各30人が新聞投書で使用した総語数が異なるため、母語別の平均延べ語数、平均異なり語数を求めてG値を算出した。さらに、日本語学習者については群別にG値を算出した。結果を表3に示す。

表3 新聞投書の語彙多様性 (母語別・群別)

	平均延べ語数	平均異なり語数	G値
日本	133.4	78.8	6.83
中国	136.4	84.7	7.21
韓国	137.6	78.2	6.64
G値	上位群	中位群	下位群
中国	7.42	7.08	7.13
韓国	6.98	6.98	5.97

表3によれば、語彙多様性（G値）は、韓国6.64<日本6.83<中国7.21の順であり、仮説1「日本語学習者の語彙多様性は日本語母語話者より小さい」は支持されなかったことになる。

つまり、日本語母語話者は、新聞投書において必ずしもさまざまな必要な語彙を日本語学習者以上に豊かに使用しているとは限らない。むしろ、新聞投書は文学的な文章ではなく意見文であるため、適宜、主張内容に必要な範囲に限り語彙を選択して使用しているのではないかと考えられる。

また、日本と中国、日本と韓国、中国と韓国の各組で、G値の平均値について対応のないt検定を行った結果を表4に示す。

表4 日本語学習者G値のt検定

	N	平均値	SD	t 値	p 値
中国	30	7.21	1.140	2.110	0.039
韓国	30	6.64	0.928		

中国と韓国の母語話者間においては、 $t(58)=2.110$ 、 $p=0.039$ 、 $p<0.05$ であり、統計的有意差が認められた。よって、中国語母語話者は韓国語母語話者に比べて語彙多様性が大きいことがいえる。これは表3をみると、使用語彙の異なり語数が日本(78.8)と韓国(78.2)はほぼ同じなのに対して、中国(84.7)が大きいことに起因する¹¹⁾。

4.3 新聞投書の語彙の難易度

仮説2「日本語学習者の上位群は難易度別語彙の使用状況が日本語母語話者に近い」ことを検証するため、日本語母語話者と日本語学習者の母語と群別に使用語彙の難易度の状況を調査した。表5に結果を示す。表中の「語彙の難易度」における「初前」は初級前半、「初後」は初級後半、「中前」は中級前半、「中後」は中級後半、「上前」は上級前半、「上後」は上級後半を表す。

表5 新聞投書の難易度別語彙使用率(母語・群別)

		語彙の難易度					
母語	群	初前	初後	中前	中後	上前	上後
日本 (J)	全体	27.4	19.3	23.7	22.2	7.3	0.1
	上位	27.0	20.7	23.6	22.9	5.6	0.2
中国 (C)	中位	26.4	23.4	22.9	22.7	4.5	0.1
	下位	25.1	23.7	23.9	24.3	3.0	0.0
	全体	26.2	22.5	23.5	23.3	4.4	0.1
韓国 (K)	上位	25.8	20.9	25.0	21.7	6.5	0.1
	中位	29.2	22.0	22.5	22.5	3.7	0.1
	下位	33.9	25.3	23.4	15.9	1.5	0.0
	全体	29.0	22.4	23.7	20.6	4.3	0.1

表中の日本語母語話者(J)をみると、上級前半の語彙使用率(7.3%)が中国語母語話者(C)・韓国語母語話者(K)のいずれと比べても高いことが注目される。また、初級後半の語彙使用率(19.3%)が同様に他と比べて低いことが注目される。そこで、いま難易度別語彙の6群を使用率が低い順に並べ換えてみると次のようになる。

日本(J) 上後0.1<上前7.3<初後19.3<中後22.2<中前23.7<初前27.4

通常、上級語になるほど語彙の難易度が高いため使用率は低くなり、初級語になるほど難易度が低いため使用率が高くなることが予測される。このことからすると、上掲の日本（J）の難易度別語彙の6群の語彙使用率においては、初級後半の語彙使用率（19.3%）が中級の前半（23.7%）・後半（22.2%）よりも低くなっている点が特徴的であるといえることができる。

そこで、日本（J）との比較のため、中国（C）・韓国（K）のそれぞれの群別の語彙使用率に日本の難易度別語彙使用率を加えてグラフ化した結果を図2に示す。

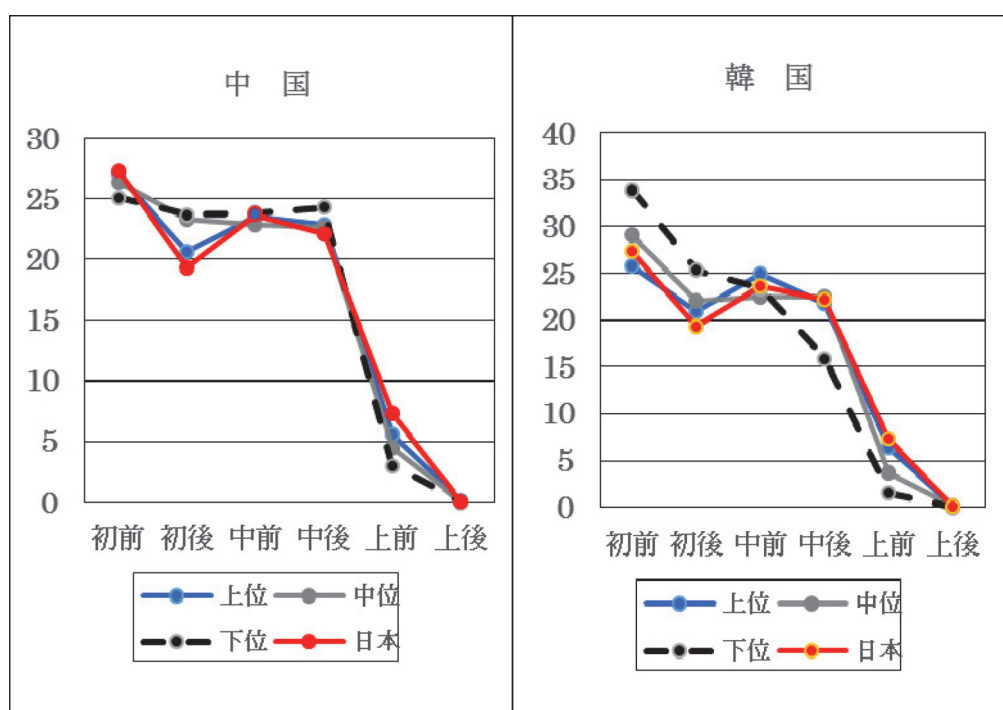


図2 新聞投書の難易度別語彙使用率（中国・韓国の群別と日本）

図中の中国の上位群（青）をみると、日本（赤）と同様に、初級後半の語彙使用率が中級前半・後半よりも低くなっている。また、韓国の上位群（青）をみても、日本（赤）と同様に、初級後半の語彙使用率が中級前半・後半よりも低くなっている。一方、中位群（灰）をみると、中国・韓国では、初級の後半と中級の前半・後半がほぼ同じであり、この点で上位群と異なっている。つまり、難易度別語彙の使用状況は、日本語学習者の上位群については日本語母語話者と非常に近似した傾向を示している。このことから、仮説2「日本語学習者の上位群の難易度別語彙の使用状況は日本語母語話者に近い」は支持されたことになる。

では、なぜ初級後半の語彙使用率は日本語母語話者及び日本語学習者上位群では低くなっているのだろうか。これは、中級の前半・後半及び上級の語の使用率が高いため、相対的に初級後半の語彙使用率が低くなっているものと考えられることができる。つまり、日本語母語話者及び日本語学習者上位群は、新聞投書において現行の診療体制での市民病院の存続を求めするために、例えば中位群・下位群と同じように「病院・思う（初後）」という語を使用する一方、本タスク達成のキーワードとなる「必要（中前）」「地域（中後）」や「閉鎖・存続（上前）」等の語を中位群・下位群よりも数多く使用している可能性がある。

そこで、いま「閉鎖」「存続」の使用度数を調べてみると、日本語母語話者はそれら上級前半の語を全員が使用しているのに対し、日本語学習者の上位群はその半数程度が使用するが、中位群・下位群はさらにその半数程度が使用するにとどまっている¹²⁾。実は、それらの語を使用することは、タスク達成に必

要な自身の意見を主張するために重要な役割を果たし、意見文の内容の評価に関与すると考えることができる。この意味で、中級・上級の語彙は初級後半の語彙よりも自身の主張を述べる意見文としての新聞投書の評価に関与している可能性があるといえるのである¹³⁾。

5. おわりに

本稿では、総合評価で高い評価を得た意見文としての中国・韓国の日本語学習者による新聞投書を語彙の観点から分析すると、難易度別語彙の使用状況が日本語母語話者に近いことが明らかとなった。

新聞投書で自身の意見を主張するためには、文章構成といった表現形式面が重要である一方、分かりやすさ、説得力のような表現内容面も同様に重要である。すなわち、意見を主張する際にはそれに適した語を選択し、的確に使用することが意見文の成否に少なからず関与することを、日本語母語話者、中国・韓国の日本語学習者の上位群が初級後半の語よりも中級・上級の語を多く使用しているという状況から示すことができた。これは、中国・韓国の日本語学習者はもとより国語教育における児童生徒においても、意見文の主張内容に関する適切な語彙知識を習得し、自身の意見を表現するためには適切な難易度レベルの語彙を使用することの重要性を示唆する。

今後の課題としては、新聞投書以外の意見文を対象に難易度が異なる語彙の使用状況を調査すること、また意見文における使用語彙の頻度以外に特に語彙内容に焦点化した調査を行うことを通して、意見文の評価における語彙の位置づけを考究することが挙げられる。

注

- 1 意見は「事実」に対するものとしての「考え」。日本国語教育学会『国語教育辞典』（2001：12）。
- 2 総合評価1項目、教員使用10項目（要旨の明確さ・重点の置き方・文章の組み立て・論理性・事実と意見の判別・論点の明確さ・書き出し印象・活気がある・素直さ・小学生らしさ）、自分用印象8項目（わかりやすさ・表現力・説得力・心が動く・内容理解・内容に同意・内容を納得・個性的）、小学生用印象5項目（わかりやすさ・表現力・説得力・心が動く・内容理解）の計24項目。
- 3 分かりにくいと評価される意見文の要因は、「主張文のサポートとなる事実文がない、もしくは不足している」「主張文そのものがない、もしくは不足している」の2つ。長谷川・堤（2011：32-33）。
- 4 二通（2001：76）は、作文課題では文章構造や段落の意識化が重要であるため、文章構成の枠組みの提示が有効であるとし、意見文の場合、「問題提起—意見—その根拠—結論（意見の確認）」を例示している。
- 5 国立国語研究所「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」（現在の「日本語学習者による、日本語。母語対照データベース（対訳作文DB）」に収録されている、公共の場をすべて禁煙にする規則の制定の是非を述べた作文から任意に抽出した20編。
- 6 金澤（2014：6-7）。なお、文章の長短の基準は示していない。
- 7 詳細は「表11総合評価の凡例一覧」（金澤2014：20）。ここでは評価基準の記載方法を一部変更した。
- 8 「学習項目解析システム」は短単位に基づく語彙項目を解析している。機能語は含まない。
- 9 語彙の難易度レベルは、日本語教育歴10年以上の教師5人が判定し、統計的に調整している。スルダノヴィッチ・李（2013：283）。
- 10 「タスク別の【総合評価】の結果」（金澤2014：36-37）を基に、○：2、△：1、×：0として算出した。

- 11 中国の異なり語数が他と比べて多い理由は、漢語の多用が考えられる。なお、新聞投書の平均文字数をみると、韓国37.7<日本39.5<中国40.1であり、記述量の多さが影響している可能性もある。
- 12 「閉鎖」の使用度数は日本語母語話者63、日本語学習者の上位群36、中・下位群16である。「存続」は、日本語母語話者30、日本語学習者の上位群12、中・下位群6であった。なお、金澤（2014：138）は、この2語はキーワードながら、抽象度が高く、上位群の者にとってもあまり馴染みがないためか、上位群の場合、半数の者しか使用できなかったとしている。
- 13 新聞投書で高い評価を得るためにキーワードの使用が有効であるという点からいえば、「タスクの内容」（3.1（1））の文章中に「閉鎖」「存続」の語がみられるため、日本語学習者は日本語母語話者に比べて本タスク達成に向けてタスク内容の読解を十分に行っていない。また、キーワードに十分に注意を払うというストラテジーを身に付けていないことが考えられる。

参考文献

- 井上次夫（2015）「語彙の多様性と難易度から見た意見文の成否—中国・韓国の日本語学習者と日本人学生の比較から—」『第17回専門日本語教育学会研究討論会誌』 pp.8-9
- 金澤裕之（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』、ひつじ書房
- 菊池康人（1987）「作文の評価方法についての一私案」『日本語教育』63、pp.87-104
- 国際交流基金・日本国際教育協会（1994）『日本語能力試験出題基準』東京官書普及
- スルダノヴィッチ=イレーナ・李在鎬（2013）「日本語教育用の形容詞の語彙リストと難易度レベル」『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』（国立国語研究所）、pp.281-290
- 田島ますみ・深田淳・佐藤尚子（2008）「語彙多様性を表す指標の妥当性に関する研究—日本人大学生の書き言葉コーパスの場合—」『中央学院大学社会システム研究所紀要』9(1)、pp.51-62
- 田中真理・坪根由香里・初鹿野阿れ（1998a）「第二言語としての日本語における作文評価基準—日本語講師と一般日本人の比較—」『日本語教育』96、pp.1-12
- 田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里（1998b）「第二言語としての日本語における作文評価—『いい』作文の決定要因—」『日本語教育』99、pp.60-71
- 槌田和美・今井美登里（2008）「留学生の文章のわかりにくさの原因を探る—アカデミック・ライティングの効果的指導のために—」『桜美林言語教育論叢』4、pp.25-42
- 二通信子（2001）「アカデミック・ライティング教育の課題—日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造の分析から—」『北海学園大学学園論集』110、pp.61-77
- 橋本直幸（2014）「語彙調査に基づくタスクの分類—『語彙多様性』と『個人差』の観点から—」金澤（2014：287-303）
- 長谷川哲子・堤良一（2011）「アカデミックライティングにおける『分かりにくさ』の要因は何か？—意見文の分析を通じた一考察—」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』11、pp.21-34
- 長谷川哲子・堤良一（2012）「意見文のわかりやすさを決めるのは何か？—大学教員による作文評価を通じて—」『関西学院大学日本語教育センター紀要』1、pp.7-18
- 森田富美子（1981）「作文の評価」『日本語教育』43、pp.17-33
- 吉川愛弓・岸学（2006）「作文の評価項目に関する検討：意見文の評価は何に影響を受けるのか」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』57、pp.93-102

参考 URL

松下達彦 (2017) 「松下言語学習ラボ」 <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/>

本研究は科学研究費基盤研究 (C) 「日本語コーパスと内省に基づく論述文語彙指導のための Web 教材開発とその評価」 (課題番号25381286、平成25年度～29年度) の助成を受けている。